

幼 児 童 話 の 性 格

椋の美幼稚園

椋

葉

勇

ジエームス・バリー卿の書いた「ピーターパン」という物語は、世界中の子供たちに親しまれ、日本でも出版されたり放送されたりしてひろく知られているが、この物語の主人公ピーターは「行けずの國」という別世界の子供である。このピーターが、ときどきウエンデイという人間の子供の家をのぞきに行くのである。何のために來るのかというと、ピーターはこういつている。

「僕はお話の切れ切れでもいゝから、できるだけ拾つてみようと思つて、ここまで來るんだ。しかしやくにさわるのは、おしまいまで聞き通すことがないんだ、ねえ、ウエンデイ、この前僕が來たとき、あなたのお母さんは、とても面白いお話をあなた方にしていたね」

ピーターは別世界からお話を求めて來たのである。

この物語は子供が、いかにお話を慾求しているかを示唆している。童話は實に大切な子供の心の糧である。特に幼児期に於て一層の必要さを感じるのである。けれども童話を専門

的に子供に話している人たちも、幼児の前には立ちたくない、幼児相手の童話は、遠慮したいという人が多いようである。それは幼児に對するお話がなかなかむづかしいと考えられているからである。

成程幼児童話はむづかしい、まだ人生の經驗に乏しくしたがつて語彙も少く理解力の低いその上緊張の永續しない幼児に對するお話は、より大きい子供たちに對するお話に比べて骨の折れることはいふまでもない。幼児とともに生活し、書物の上だけでなく生きた子供たちをほんとによく知つてゐる保育者にとつては、むしろ幼児童話はやさしいものとも考えられるのである。では幼児にはどんなお話をどんなに話しかせたらよいのでしょうか。

一、單純なること

單純なること、いいかえると複雑でないことが幼児童話の性格として大切である。であるから童話の中に出て來る人物

の数が比較的少なくその性格がはつきり出ているのである。桃太郎はどこまでも強い子供であり、狼はどこまでも悪者として表わされている。大人の讀物でも講談は、この點で共通のなところがある。

しかし單純ということは、單調ということと同一ではないのである。幼兒童話は單純ではあるが、變化を求めているのである。でないといふ幼兒の活動性が満足されないのである。そこで幼兒童話ではよく反復という形式が使われるのである。

二、反復

内容的には同一又は類似の事件が反復され、表現の上では同一又は類似の言葉が反復するのである。反復形式の童話は數限りもないが、三匹の小豚や狼と七匹の小山羊などその一例である。面白いことにはその反復が殆どすべて三度であることである。三という數と童話とはなかなか深い縁があるところで、桃太郎のお伴が三人、猿蟹合戦の助太刀も三人、どこまでも三という數がつきまとうのである。或る學者の説によると、未開民族は三までしか數觀點がなかつたろうといわれているが、兎に角、二度のことは三度、三度目の正直、三という數字と人生との關係は面白いと思うのである。しかし童話の中には三度以上の反復もあるし、又すべての幼兒童話が反復形式でなければならぬというのではないのである。

三、明るること

子供は本來明るい性格の持主であるが、ややともすると大人が明るい子供の夢をうばうのである。私共は戦時中の思いつた優越感の反動で過度の劣等感にとらわれがちな傾向があり、この大人の氣持が自然に幼兒供たちの心をも暗くしている傾向がないとはいわれないが、童話の世界では、いつも明るい希望を子供たちに與えたいと思うのである。勿論人生には苦しさもあり暗さもあるのであるが、それはもう少しあとで知らせよう、その苦しさ暗さの中でも明るさを失わない精神を培つて行きたいと思うのである。

四、積極的なること

明るることと關連して幼兒の童話には積極的な要素が望ましいと思うのである。幼兒が同一の童話を何回もよるこんできくという理田の一つは、幼兒は童話の筋全體をつかんでいないで部分的な興味に満足しているからである。最初から終未までの筋の面白さより部分の面白さに捉われがちで、筋としてははつきり頭に入らない場合が多いので、同一の話を幾度もききたがるのである。

であるから童話の筋全體として見たときに、よいお話であっても、部分的に缺陷があるものは、避けたいと思うのである。特にその部分に興味がある場合は尙更である。

たとえば、兄弟けんかをするな、ということをお話したために、兄弟けんかをするところを面白く話し、あとでその結果二人がひどい目にあつて、それから仲よくするようにな

つたと結んだとして、子供たちの最も興味を覚えたのは、兄弟けんかをする場面であつたら、反射的にそれを模倣することもあり、逆の効果をもたらすことになるのである。それよりは積極的に、仲のよい兄弟のお話をした方がよいことになるのである。幼児には成可く、べからずの消極的よりもべしの積極的な童話を與えたいと思うのである。

五、親密性のあること

幼児は自己中心であり、見聞の範圍が狭いので、自分の経験外のことにはあまり興味を感じないのである。アンデルセンの有名な童話「みにくい家鴨」を最も巧みにやつたある外國の童話の先生が、一向子供たちに迎えられなかつた理由として、その地の子供たちが白鳥を全く知らなかつたことが擧げられているのである。尤も子供は随分突飛な空想を描くが、何か自分の親密なものをもとになつてゐる場合が多いのである。昔嘶の猿蟹合戦の助太刀が海邊では昆布が加わり、田園では馬糞が加わつてゐるのも面白いと思うのである。

六、リズムと擬聲

幼児期は韻律期といわれている位で、童話の内容よりも表現、特に音のひびきに深い興味を感じるのである。

「おじいさんが山へ柴刈に行きました」と説明を進めるだけでは満足しないのである。

「おじいさんが、ドツコイシヨ、ドツコイシヨとお山へ行

きました、おばあさんは川へ行つて、ジャブ ジャブ ジャブ ジャブおせんたくをしていますと、ドンブラッココ、スッコッコ大きな桃が流れて來ました」

リズムカルな言葉の運びを喜ぶのである。

リズムと關連して幼児童話にはよく擬聲が用いられるのである。幼児には、ただ

「犬が來ました」

という説明語だけでなく、

「ワン ワン ワン 犬が來ました」

といった方が興味が大きくなるのである。童話の専門家の中にはいろいろ苦心研究して、眞に迫る物眞似をする人があるが、私たちにはそれほど必要はあるまい。ワンワンで直ちに犬が印象されれば結構である。

以上は幼児童話としての性格の一端を申し述べたのであるが、この外優れた童話として一般的な條件を具備すべきこととはいうまでもないのである。

ではそんな童話の材料をどこに求めるか、それをどんなに取扱つて行くか、話言葉はどうするか、問題はたくさん残つてゐるが、兎に角ききたがる子供たちに童話を與えていたよきたいと思うのである。カウルスノ夫人が「私はお話ができなないなどといつてはならない、ただ試みよう」といつてゐるように、幼児の中に生活してゐる私たちは誰でもお話ができる筈である。所謂童話家のように別に童話術を習得する必要もあるまい。自然の儘の態度が寧ろ望ましいと思うのである。